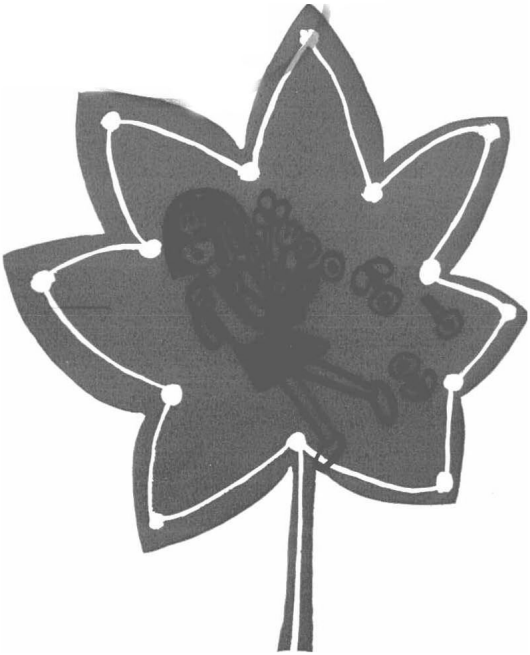
なにも言わなくても

伊沢ユリ子

なにも言わなくても

伊沢ユリ子

二見書房刊



昭和43年10月25日　初版発行

《検印廃止》

© Printed in Japan.

なにも言わなくても

定価380円

著者　伊沢ユリ子

印刷　株式会社堀内印刷所

製本　株式会社徳住製本所

発行　株式会社二見書房

振替東京2639番
電話東京(263)0034番
東京都千代田区三崎町2-18-2

まえがき

伊沢君と初めて話をしたときのことが私にはいまだに印象に残っています。学級担任としてでもなく、教科担任としてでもなく、他学年所属の文芸クラブの顧問として会ったのが最初でした。型通り部員の一人一人に出身小学校、趣味などを聞いているうちに私は伊沢君に見慣れぬものを突然つきつけられたような困惑を感じました。伊沢君の話し方が異様なほど緩慢だったのです。更に聞きだすと岩手県から越してきたばかりだというのです。私はすぐ生まれてからずっと岩手に在住していたのかどうかを尋ねました。彼女はすっかり緊張してしまい、その上ひどく怯えた様子で頷きました。すると再び彼女に対して解せぬところがでてきました。東北に生まれて今まで育ったというのに全くの標準語（東京方言）なのです。方言を出すまいと意識的に話している様子も察知できませんでした。

クラブでは作文指導を中心にやっていましたのでそのことを話すと、書くより読むことが好きだと答えました。

五月に入ってからでしたか、彼女の学級担任と話をしているうちに私は全く偶然に彼女の両親が共に聾唖者だということを知りました。と同時に、彼女の話しかた・ことば使い・読書を好むこと、そして聾唖者の両親——多分に皮相的ではありましたがこの四つのことを私なりに一線上に並べることができました。以来三年間、作文指導を通して彼女を見守ってきました。

最初の頃は自分を表現することのできぬ、全く消極的な女生徒でした。しかし岩手の小さな村で生活保護を受けながら近所の田畑の手伝いをし、お金というものを多く知ることなく、粗末な家に育ってきた子供にしては全く暗さは感じられませんでした。中学二年のはじめ頃までの彼女の生活態度には〃どうしようもない〃〃しかたがない〃という自棄的な面が強く出ていました。誰にも吐露することのできぬ鬱積した気持ちにふりまわされて生活していたようです。最後まで物事を突きつめることを知らぬ生徒でした。家庭生活の記憶を明確に持たぬ生徒でした。岩手には親戚もあるのですが、殆んど親子四人だけの生活だったために彼女にとり比較対照にするものが多くはなかったことになりましょう。常に〃オッチの子〃として過ごしていたようです。現在、彼女は何人かの岩手の友達と文通をしていますが、そのひとりに今年小学校

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

六年生になる女の子がいて、もう何年間か文通が続いているそうです。このことを聞いたときに私が笑うと〝だって、お友達だったんだもの〟と言いました。彼女の幼い日の友交がわかっていただけるかと思います。

両親が聾唖者であることにたいして何も感じないで過ごした小学校低学年。母親が農業を嫌ってひとり上京した頃からの両親に対する関心。兄の非業な死を知った小学校高学年、家族四人揃ったのも僅かで父親と離別しなければならなくなった小学校六年。両親に対しての露骨な反抗。作文コンクール入選。以上が彼女に接し、あるいは作文を指導しながら感知しえた彼女の成長ぶりかと思います。

彼女が三年になってすぐ生徒総会がありました。クラブ予算についての質疑のとき、彼女が手を上げました。もの珍しげに視線を向ける多くの生徒達の間を一般生徒席から講堂の壇上に歩む姿をみたとき、私は伊沢君がほんとうに成長したことを知りました。

特異な環境に育ったひとりの子供の歩み、それにしては背負うに重すぎる荷の連続ではなかったかと思います。

伊沢君が今日までとにかく大きなつまずきもなく成長してきたことには勿論両親の力は言うまでもないことでしょうが、姉の悠子さんの存在が大きな影響を持っているようです。伊沢君

のいう「背中を向けていても話ができる」姉が彼女にとり唯一の相談相手だったということも彼女の真の気持ちだったと思われます。

次に本文章作成の経緯に少し触れておきたいと思います。本文章は読売新聞社、千葉県教育庁主催の昭和四十二年全国小、中学校つづり方コンクール千葉県審査に入選した『指』を二見書房の御好意で改作したものです。しかしながら百枚を越える原稿を書くことは中学生にとり殆んど不可能なことは明白でした。そこでまず〝章〟を設定し、その章に関することを思いつくままに書く。『いじめられたこと』『冬のこと』『母のこと』『たきぎ集めのこと』、といったように記憶の明瞭なところから順不同で書くように助言しました。記憶違いの訂正は姉の悠子さんが受け持ちました。こうしてできあがった章の構成については全く国語の学習と同じように主題把握・構成の面から考えさせ、相談にのり、記憶に鮮明に残っている『いじめられたこと』から始まった次第です。しかしながらどうしても書けないというときには伊沢君と私、ときに悠子さんもまじってお互いに話をしながらメモをとっていくというようなこともやりました。問題になったのは会話の部分でした。こまかいことは勿論記憶しているわけもなく、いささか困惑しましたが、〝そんなことを言ったはずだ〟ということで作業が進みました。当然方言が問題になるわけですが、本人に使えない以上仕方なく、思い通りに書き進んでいました。

文章表現については中学生としてはできすぎる面が強いかとも思いますが、これには二つの理由があるかと思います。ひとつは彼女が読書をよくすること。つまり両親が聾唖者で音声による言葉の交換ができぬため、両親が多分に意識的に本を与えていたこと。このことによって、そつのないまとまった表現をするようになったと思われます。もうひとつはつづり方コンクール参加ということでいささか技巧に走らせすぎた私自身の反省ともなること。従って彼女にとり文章を書くということは好きだけれど相変らず〝辛いこと〟というのが本音のようです。しかし『自分のいいたいことを明確に表現するためなんども推こうを重ねてほしい。適切なことば使い、表現は教科書、よい作品をよく吟味して読むことで身につくのだからその努力を怠らずに続けてほしい』――昨年度コンクール総合審査評抜萃――ということだけは仕方なしにでも彼女は理解したようです。とにかくいろいろと問題点はあるかと思いますが、自分の言いたいこと、書きたいことは尽くしたようです。そこに彼女の何かをお読みとり願えれば幸いです。

伊沢君の進路は就職そして定時制高校への進学ということに決めているようです。

もっともつい最近では高校卒業後は聾唖者教育のための養成所へ入ろうかとも言っています。姉妹が言うようにこれから先、いろいろな障害がたとえあったにせよ、伊沢君の精進を心から願うと共に伊沢君一家が心の指話で固く結ばれ力強く歩まれることを願っております。

尚、伊沢君の作文に目をとめられ、深い御理解を示され、何かと御便宜をおはかり下さいました二見書房の皆様に心からお礼申し上げます。

昭和四十三年九月

船橋市立船橋中学校教諭　中山　透

なにも言わなくても／目次

まえがき　中山　透　1

オッチの子　12

かわいそうな父　20

もらい米　32

寒い冬がやって来る　44

かまくら　52

東京へ行ってしまった母　62

父姉私の三人だけ　72

うたがい　88

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

つまらない、おもしろくない　98
母との手紙　108
さようなら、室岡　118
ふたたびわかれわかれに　130
かわってしまった父　142
お正月　154
船橋中学校一年入学　162
おかあちゃんのバカ！　182
作文コンクール　202
みんな一緒になれた　214

装幀・カット　池永広美
池永香南美

なにも言わなくても

——ユリちゃんの日記

オッチの子

いじめっ子からようやく逃げ、息も苦しくなくなった。

冷たい刺し込むような長雨が遠くなってから、気がつかない間に室岡(むろおか)の村にも夏が来ていた。田畑の真中をひんやりとする水がすばやく光りながら流れる川の橋のたもとに大きなくるみの木があった。その上の濃い青色の空には真白すぎる積乱雲(せきらんうん)が気の遠くなるほど高く高くのぼっていた。まぶしい目がまた悲しくなってかすんできた。ほこりにまみれた小石をけった。乾いてヒリヒリする空気の中にむせかえるような砂ぼこりがたった。

くるみの木だけだった橋のたもとにつっと湧きでたように二人の男の子が突っ立っていた。今度は一番いやな子。山の久夫達だった。私は泣きながら、しかし歩くより仕方がなかった。

「バカ！　オッチ、オッチ」

軽く歌うように調子をとり二人の男の子は私のまわりを踊りだした。

「オッチ、オッチ」

私はいつもならただ泣くよりしかたがない「オッチ」ということばよりも、畑道をスル、スルと滑って隠れる蛇のような、久夫の手にしたゴムヒモの揺れに追われながらグルグルと逃げまわった。ヒュウ、ヒュウというううなりが足音にまつわりつき、黄色のほこりをたたせた。ほこりだらけの、筋のようにきんと張った久夫の足に汗の跡がついていた。グルグルまわる。もうゴムヒモだけがこわかった。ヒュウ、ヒュウ、熱い細っこい痛みが足首をしばった。また涙があふれはじめた。痛くて涙がでるのか、ゴムヒモがこわいのか、これから先こんどはどんないじめ方をされるのか。いつものように久夫が早くあきてしまってほしかった。私は自分が泣くたびに遠いところへ置きざりにされるような、いてもたってもいられない悲しみがあとからあとからとめどもなく湧いてくるのを感じた。

油ぜみのじれるような鳴き声が背中のカバンの教科書や鉛筆箱のころげまわる音と一緒になって私を追いかけてくるような気がしてならなかった。

「おとうちゃーん」

縁側で頬杖を突いて横になりタバコをすっている父。地下足袋をつけたままの足首がのんび

りと動いていた。

「おとうちゃーん」

しかし、父は私をみてくれない。

「どうした、ユリちゃん」

父のかわりに向かいの佐々木さんのおばさんがトマト畑から首を出した。父の視界に佐々木さんのおばさんが誰かに話しかけているのが入ったに違いなかった。私は体を起こしかけた父に飛びついていった。足組みが外され父は私を抱いてうしろへひっくりかえった。

幾筋も重なって足にはう赤いみみずばれを見た父の目が大きくふくれ私の目と口を見つめた。激しく揺れる父の瞳に私が小さくうつっていた。

荒くザラザラした父の手が恐れるように赤いみみずばれを一筋ずつなでている。安堵(あんど)が私を何倍も悲しくさせた。橋のたもとで二人の男の子にいじめられたことを告げるのに私は自分の泣きじゃくりの激しさでことばが途切れ、長い時間がかかった。足を見つめ、私の目を探る父が幾度もうなずいた。私はますます悲しくなった。足の痛みは感じなかった。私はただそうしていたいだけのように、父の汚れてつぎのあたったゴワゴワした野良着に顔をうめて泣き続けた。両肩をそっと押しもどされ、私は縁側にチョコンと腰かけさせられた。鼻がくすぐったい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co